

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語教育における言語能力と言語運用の基礎付け
Author(s)	山田, 純
Citation	教育学研究紀要 , 22 : 181 - 183
Issue Date	1977-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050428
Right	
Relation	



英語教育における言語能力と 言語運用の基礎付け

山 田 純
(広島大学大学院)

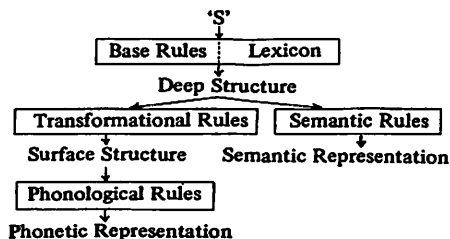
変成生成文法が文型練習に代表される Audio-Lingual Habit 理論を覆し、外国語としての英語教育に多大な影響を与えたのは事実である。しかし、変形文法の根本概念である competence (以下、言語能力とする) と performance (以下、言語運用とする) は、言語学の中で確固たる地歩を得るに至っていない。本稿の目的は、Chomsky (1965) の言語能力と言語運用論を Derwig (1973) と Steinberg (1970, 1976) の Chomsky 批判に基づき、再検討し、英語教育における立場から両概念がいかに捉えられるべきであるかを考察するところにある。

Chomsky によって考え出されたこの概念は、彼の文法論の中核を成しているにも拘わらず、その不明瞭な定義のため、異なった人々に異なった解釈を許し、誤解と混乱を引き起こした。Derwig は、Chomsky がこの論に関して一貫性を欠いているということを示し、3 様の解釈が可能であると指摘し、それぞれに批判を加えている。

解釈 1 Chomsky の文法 (すなわち、言語能力のモデル) は、言語運用の理想化されたモデルであるという見方が可能である。しかしながら、Chomsky (1965:9) 自身、「特定の生成文法で、ひとつの文が、ある派生構造を有しているという場合、話者あるいは聴者がそのような派生構造を構成するためにどのような実践的な、あるいは効果的な仕方で、文生成プロセスを踏んでゆくか、ということについては何も述べない」と言っている。さらに、代役記号 'S' で始まる

Figure 1.

CHOMSKY'S STANDARD THEORY GRAMMAR



Chomsky の文法 (図 1 を参照) は、思考や感情を音声に変え、音声から意味解釈を行なう実際の発話行動および発話理解行動とは、ほど遠いものである。したがって、このような解釈は、支持され得ない。

Chomsky の文法は、Steinberg (1976) の用語を用いると、「統合的運用モデル (integral performance model)」となり得ないということ、換言すれば、その文法のみで、発話・理解の言語運用プロセスを説明するには不充分であるということ、を意味するものである。

解釈 2 Chomsky (1965:9) は、次のような主張もしている。「道理に適った言語使用モデルは、ひとつの基本的な構成部門として、話者・聴者の言語知識を表わす生成文法が組み込まれていなければならない。」これは、言語能力モデルが、理想化された言語運用モデルの中心的な構成部門である、ということの意味することになる。Steinberg は、このモデルが、ひとつの構成部門としての文法 (言語能力) と、もうひとつの主要部門である言語使用の方略 (strategies) あるいは発見装置 (heuristics) から成っているところから、それを componential performance model と名付けている。つまり、発話をするというような行動は、これら 2 つの主要な構成部門の相互作用の結果である、と考えられる。加えて、記憶の限界、注意の散漫、注意や興味の移行、信条のような要因が、これらの主要部門と相互作用を起こす、ということが Chomsky によって論じられているものである。しかし、これに問題がない訳ではない。Derwig (1973:274) は、「その言語運用モデルの言語能力部門のみが、明示的に規定されているが、残りの部門は、存在して作用し得る、と憶断されているにすぎない。したがって、言語能力部門が、他の部門と相互作用したり、あるいは、相互関連しあっているというその仕方は、示されていない」と指摘している。

解釈 3 Derwig (1973:281-296) は、Chomsky の言語能力という概念を、言語運用とは掛け離れて独立した抽象的な実体として見ることも可能であると、

次のように述べている。「Chomsky が言語能力と言語運用を区別する場合に用いる『理想化』の性質は、判然としている。すなわち、それは、現実世界の実体（言語運用）とその理想化されたもの（言語能力）との間に論理的矛盾関係が通用するような『理想化』なのである。」この解釈によると、Chomsky の文法の存在価値は、非常に希薄になる。

もし、以上の解釈が正しいならば、Chomsky の文法は、心理的なものは何も表わさないということになるであろう。すなわち、彼の文法の致命的な欠陥は、それが原則的には心理学的現実性を持ち得ないかもしれないという疑惑にある。Steinberg は、さらに、Chomsky の文法規則 (Base Rules) も心理学的に現実的ではない、と主張する。その主張の論理は、次の如くである。Chomsky の文法の派生構成の順序は、Chomsky 自身が認めるように心理学的に現実的ではない。他方、実際に文法規則の設定は、統語部門から始まり、意味部門と音韻部門で終結するというような構成順序に依存している。この構成順序が心理学的現実性を持たない場合、そして、文法規則がそのような心理学的に不当な順序に基づくものであるとするならば、この Chomsky の文法規則は、どうして心理学的に現実的であり得ようか、と Steinberg は弁駁するのである。結局、Steinberg (1976) が、結論しているように、「Chomsky の文法規則は、総じて、それが依存している構成順序と同様に心理学的に不当である」ということになる。

上述の議論から、Chomsky の文法は、どのような解釈においても言語運用モデルを構築するという目的から外れ、それ故に、捨て去られるべきものとなろう。では、どのような文法が、有用であるか。その答えは、単純明快である。すなわち、それは、言語運用に適切な文法ということになる。それは、実際の話者と聴者の言語使用過程に即応していなければならない。また、そのような満足のゆく言語運用モデルは、少なくとも話者の基本的言語能力（たとえば、文法的で、それまで聞いたことのないような新しい文を発したり、理解する能力）を規定し、説明できなければならない。それ故に、そのようなモデルは、言語使用者が文法文（時には非文法文）のみならず、用いられる文脈に適切である文をも発し、理解できることを許容する装置を具備していなければならない。（因みに、Chomsky の文法は、この後者の問題を処理するのにも不十分である。たとえば、*you must, you should, you may* の用法には、はっきりとした区別がある。つまり、多くの場合、*you may* が最も丁寧であり、*you must* が最も無礼な表現である。しかし、Lakoff (1972) は、

ある場面では、ちょうどそれが逆になるということを示している。これら文脈につながっている法助動詞を記述するためには、表層的な統語論的文脈だけの分析では不十分であり、一般的文脈の遥かに精巧な分析が要求される。外国語として英語を学習している者は、明示的にせよ暗示的にせよ、そのような言語現象を知らずして、これらの法助動詞が正しく使えないということは明らかであろう。）

適切な言語運用モデルについて論じる際、もうひとつ考慮すべき問題がある。意味表示を音声表示に移動させ、かつ、音声表示を意味表示に移動させることが可能になる「両方向性 (bidirectionality)」の性質をそのようなモデルが有し得るか否か、という問題である。これは、未解決の問題である。現代文法は、Chomsky の文法にせよ、生成意味論文法にせよ、 $A \Rightarrow B/C$ という形態（つまり \Rightarrow は、変形上の変化を示し、したがって、 A が C という環境では B に変化するということを示す）を指定する定方向性の規則を含んでいる。たとえば、 $\left[\begin{array}{c} C \\ - \text{Voiced} \end{array} \right] \Rightarrow \left[\begin{array}{c} C \\ + \text{Voiced} \end{array} \right] / V-V$

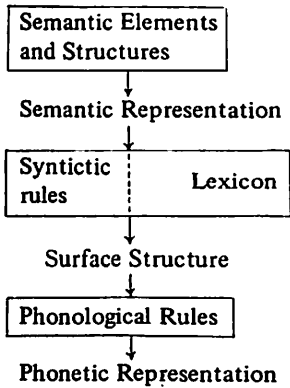
というような音韻規則は、うまく機能するが、その逆の $\left[\begin{array}{c} C \\ + \text{Voiced} \end{array} \right] / V-V \Rightarrow \left[\begin{array}{c} C \\ - \text{Voiced} \end{array} \right]$ は、成り立たない。したがって、そのような文法は、両方向性を持ち得ないのである。実際問題として、ひとつの両方向性を持つ言語運用モデルを想定することは、不可能のように思われる。勿論、両方向性を持つひとつの運用モデルの方が、定方向性を持つ2つの運用モデルよりも経済的ではあるが、前者の設定は、非現実的であろう。母国語話者は、言語発話と言語理解に関して、2つの異なった言語能力を持っている、と言ってよいであろう。このことは、幼児の言語習得における発話力と理解力の不均衡、あるいは、その他の事例（たとえば、Troike (1969) の2重方言使用者に関する実験研究など）から明白であろう。もし、そうであると、たとえ Chomsky の運用モデルが発展可能なものと仮定しても、その主要部門のひとつである言語使用の方略は、発話のための方略と理解のための方略とに2分されなくてはならず、結局、2つの異なった運用モデルを作る、ということになる。（しかし、それらは、共有部分として言語能力部門を内蔵している。）他方、統合的運用モデルでは、全く異なった発話運用モデルと理解運用モデルの組み合わせ、ということになる。（Chomsky のモデルとの相違点は、発話運用モデルと理解運用モデルには、共有部門がない、ということにあり。）

さて、ここで、生成意味論文法（図2を参照）を統

合的運用モデルと見做し、英語学習者の発話力を中心に、英語教育の観点から考察を加えてみる。最近、学

Figure 2.

GENERATIVE SEMANTICS GRAMMAR



習者の言語を探究するため、学習者の犯す誤りの分析が有効であるという意見が著しくなっている。それは、学習者の言語自体が、母国語話者の言語と同様に自立的であり、規則に支配されている体系である

と考えられるからである。勿論、学習者の言語は、母国語話者のものとは多くの点で異なるが、共通部分があることも事実である。生成意味論文法モデルでは、意味表示の内容が、あらゆる言語において共通である、という仮説に立っている。そうすると、少なくとも、その部分においては、学習者も母国語話者も同じであるが、相違は、統語規則と語彙項目から始まる。(勿論、部分的には共通点もあり、それは学習者のレベルによって増減する。)たとえば、*I have written the letter for two hours と言う学習者は、to write を彼の語彙項目の中では [+limited]、動詞の代りに、[+durative] 動詞として指定していると考えられるであろう。その場合、学習者の語彙項目の中に [+limited] という素性が存在していないというのではなく、その素性の分布が異なっていると考えるべきである。ここで、英語教育の最も重要な問題である、いかに効果的に学習者の言語を目標言語に近づけるか、という問いが発せられることになる。それに答えるには、学習項目の難易度についての考察が必要となろう。どういふ言語項目が学習容易であるか。常識的に、もし学習者の母国語あるいは言語、目標言語と皮相的に異なっているだけなら(たとえば、音韻規則だけ異なっているような場合)、何ら学習に支障は来たさず、学習容易である、という答えが返ってくるかもしれない。何故なら、学習者は、ただ、新しいコードを学習しさえすればよいか、既成の文法に多少の修正を加えればよいからである、という理由が添えられるであろう。しかし、そのような単純と思われる学習項目でさえも流暢な言語使用を目指す場合、容易ではないということ、実際の教授経験が示すであろう。たとえば、中学校1年で、英語の数詞は、ほとんど凡て教えられる。それは、日本語と音韻表示のみが異なるものであると

言えるが、中学生のみならず、数詞を使いこなすことは非常に難しい、と言われる。換言すれば、知っているが、使えないということである。したがって、生徒が為すべきことは、練習することによって習うということになる。ここで、Audio-Lingual Habit 理論支持者の文型練習の重要性を強調した点が評価されなければならない。この種の練習は、生成意味論モデルの発展に拘らず、外国語教育・学習において、必要不可欠な部分として残らなければならない。

それでは、生成意味論モデルは、英語教育にいかなる貢献をなし得るか。その典型的な答えは、発話に関する限り、必要な言語能力(すなわち、生成意味論の規則)を直接教授すること、であろう。そうすると、後に学習者は、練習によって習得できるようになるからである。実際、Muskat-Tabakowska (1969) は、「言語能力は習得されるし、多分教えられ得るであろう」と述べている。ここで銘記しておくべきことは、実際に母国語話者の言語能力を獲得した外国人は、明示的にそれを教えられていない、ということである。何故なら、言語能力について多くは知られていない、という理由からである。しかし、これは、言語能力が直接に教えられないということの意味するものではない。

このように論じると、伝統的な帰納法か演繹法かという議論が舞い戻ってくる。どちらの方法を採用かは特定の学習者に特定の言語項目を教える際、どちらがより効果的であるか、によって決まる。たとえば、上述の法助動詞の用法は、学習者が帰納することができない程、微妙なものである。他方、Sincerity may frighten the boy の to frighten のような動詞を教える場合、その厳密な下位範疇規則や選択規則を演繹的に教える必要はなく、いくらかの言語資料が与えられるならば、学習者は、その規則を暗示的に帰納するだろう。

最後に、応用言語学者あるいは英語教育学者の為すべき点を指摘して、結論に代える。まず第1は、生成意味論など関連諸科学の動向を把握すること、第2、学習者の言語を共時的かつ通時的に探究すること、最後に、どの教授法が他の教授法よりどの点で優れているかを検証すること、である。そうすることによって、言語能力と言語運用の概念がより一層明確化されるのである。

REFERENCES

Chomsky, N. *Aspects of the Theory of Syntax*, 1965, MIT.
 Derwing, B. L. *Transformational Grammar as a Theory of Language Acquisition*, 1973, Cambridge U.P.
 Lakoff, R. "Language in Context," *Lg.* 48: 4, 1972.
 Muskata-Tabakowska, E. "The Notions of Competence and Performance in Language Teaching," *LL* 19, 1969.
 Steinberg, D. D. "Psychological Aspects of Chomsky's Competence-Performance Distinction," In *Working Papers in Linguistics*, University of Hawaii, Vol. II, No. 2, 1970.
 ————. *Conceptual Foundations of Language*, Mimeo, 1976.
 Troike, R. C. "Receptive Competence, Productive Competence, and Performance," In *Monograph Series on Language and Linguistics*, No. 22, Georgetown U.P. 1969.